

# 人生 仕事

女優

浅利香津代さん(71)

▶▶ 5

# 談

かたる

△劇団を離れてプロダクションに入った浅利さんは、「葵 徳川三代」「鬼平犯科帳」などのテレビをはじめ、映画への出演も増えていった▼

監督が細かく指導

劇団にいたころは演技によく駄目出されました。ある人が「浅利、2秒早い」と言えば、別の人からは「もう少し早く」と逆の駄目出しが来ることも。怒られない



映画「薄化粧」でビール瓶を振り上げる浅利さん。手前は浅野温子、奥は緒形拳(©松竹)

## リアルな表現追求 一人芝居にも力注ぐ

がらもうまくなりたいたい一心 鳴鶴(1986年公開)で必死でついでいきました。その点、テレビの仕事では演出家も監督もほとんど何も言わない。自分の演技がこれでいいのか不安になってましたね。

映画監督の指導はさすがだなあと思うことが多かったですよ。市川崑監督の「鹿

うそは映像に映る 殺人犯を演じる緒形拳さんの妻役でした。夫の浮気相手を演じる浅野温子さんと大げんかする場面で、監督が耳元で「本気でやっほしい」と言うんです。浅

野さんに言ってるのか聞くと「言っていない。大丈夫、医者には用意してある」と。仕方ないからちよつと本気で頬をひっぱっていたんです。そしたらやり返され、髪はつかむは押し倒すは、本当に激しいやり合いになっちゃって。

緒形さんも、うそは映像に映るといふ考え方でした。私、緒形さんに頭をなただで割られて殺されるんですが、監督が「緒形が『殺す顔』にならないから本当にやりたいって言うんだ。悪いけど2回だけたたかれてくれ」と頼むんです。

あなたは木製で本物そっくりにできて。私は血のりの袋を入れたかつらをかぶり、たたかされると袋が破れて顔に血が垂れてくる仕掛けでした。それが、本番でたたかれてもなかなか血が垂れない。結局6回ぐらいたたかれ、あまりの衝撃で撮影後も起き上がれずそのまま救急車で病院に運ばれました。しばらくは片頭痛に悩まされました。

薄幸な女の役が多かったですね。NHK大河ドラマ「独眼竜政宗」では幼少期

の愛姫の筆頭乳母の役でしたが、愛姫を思うあまり疎まれ、「喜多」役の竹下景子さんにやりで刺されて殺されました。サスペンスドラマでも、夫に胃酸カリを飲ませたり崖から突き落とされたり。私、やつれた感じだからそんな役が来るのかもしれないね(笑)。

△40代以降は一人芝居にもエネルギーを注いだ。「花いちもんめ」では関西十三夜会賞を受賞するなど芸域を広げた▼

一人芝居は、大劇場の商業演劇が続けていたことに対する反動なんです。大勢の役者で演じる芝居は、いわばそれぞれの楽器が協同性を大事に演奏するコンサート。でもそのうち自分だけの音の変化、音域を確かめたくなる。一人芝居は全部自分の表現だし、自由自在に演じられますから。演じ手と観客が一体になって高揚していく。全てを出し切ってカーテンコールで割れるような拍手を浴びるとまたやりたくなるんです。

田浩二

▶▶ 次回17日掲載